

基調講演

「図書館員の新たな役割と可能性」

講師：株式会社バーソン・マーステラ

シニアストラテジスト 豊田 恭子

1 エンベディッド・ライブラリアン

専門図書館員に関するある調査で、ライブラリアンは調査を重視するが、利用者はプロジェクトへの参加や情報の加工を求めており、そこに乖離が生じるという結果が出ている。

企業図書館員の多くはエンベディッド・ライブラリアンとなっている。エンベディッド（embedded）とは「埋め込まれている、組み込まれている」の意。会社のチームに入り込み、最終プロダクトまで責任を持つ。この動きは公共図書館や大学図書館にもある。

「組み込まれた」結果、ライブラリアンとコンサルティングの役割の線引きが曖昧になり、ライブラリアンが情報を取捨選択し、利用者の欲しい情報への加工を求められる場合もある。

2 ライブラリアンは信用できる

アメリカではライブラリアンは大きな信頼が寄せられている。看護師に次いで信頼できる職業に挙げる結果の調査もあれば、家族や友人、政府よりも信頼できるとした調査もある。特に所得の低い人や社会的マイノリティにとって公共図書館は人生の決断時に大事な場所となる。

その理由は、ライブラリアンは権力と無縁であり、私利私欲を背景にしていない、というイメージがあることであり、ライブラリアンの言葉に対し、利用者は「自分のため」を思っていると感じる。その信頼は地域変革に対する図書館活用の可能性に繋がる。

3 図書館と地域変革

地域づくりの専門家、リチャード・ハーウッドは図書館が地域変革の核になりうると述べている。図書館は安全で中立的な場所であり、住民からの信頼、地元に対する愛・情熱があること、実践的なアプローチができることが理由として挙げられる。

ハーウッドの論を受け、図書館を地域変革のリーダーにする実証実験がアメリカで行われた。実験の結果、図書館が地域の中心となり、問題を解決に導いた事例が報告された。図書館は地

域づくりの拠点になり、地域貢献することで地域からの理解を得ることができる。

ライブラリアンは地域のファシリテーターとして、中立的な立場から様々な関係者をつなげられる。また、多角的な情報提供によって議論を实のあるものにしたり、住民の正しい判断を助けたりすることも可能である。

ライブラリアンがリードをとることで地域の課題解決力が強まり、住民はライブラリアンを介して「違い」や人生の困難を乗り越えられる。

4 人に寄り添うこと

企業に組み込まれていても、社員である前にまずライブラリアンでありたい。寄り添うことはやめないが、忖度もしない。私利私欲で仕事をするとう信頼を失ってしまう。ライブラリアンとしてのきっちりした調査を積み重ねることによって自分の仕事に誇りを持ちたい。

アメリカのハリケーンが起こったとき、あるライブラリアンはSNSで、避難する子供たちへのストーリータイム（おはなし会）の必要性に触れた。ライブラリアンは、人間が本質的に必要とするものを見抜き応えていくことができる。

レファレンスサービスに関する漫画『夜明けの図書館』（埜納タオ著）の例からもわかるように、ライブラリアンは人の人生に向き合い、人と情報、ひいては人と人をつなぐことができる。そして地域を引っ張る力を持っている。

5 まとめ

すてきな図書館、ライブラリアンはまだまだ足りない。もっといっぱい必要。

みんながみんなの場で頑張ってもらいたい。たくさんライブラリアンが夜空を輝かせる星のように、それぞれの場で活躍してほしいと願う。



▲基調講演